

平成30年8月29日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370079

研究課題名(和文) 3.11以降の環境文化とエネルギー政策の倫理的基盤の構築

研究課題名(英文) An ethical foundation for the environmental culture and the energy policy after the Fukushima disaster

研究代表者

小原 克博 (Kohara, Katsuhiko)

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：70288596

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：近代国家における公共性は「現代世代」の「人間」の利益を最大化することを前提とし、科学技術はそのための道具とされてきた。こうした近代的枠組みを批判し、過剰に人間中心のでも、現代世代中心でもない倫理規範を提示するためには、死者との対話や未来世代への責任意識が欠かせない。本研究では、それを「不在者の倫理」としてとらえ、その基礎付けを行った。それは公共性の中に宗教をいかに位置づけるかではなく、宗教の中に閉じ込められてきた「公共性」を解放する試みとして展開される。

研究成果の概要(英文)：In modern nations, it has been assumed that publicness brings maximum benefits to “humans” of the “current generation” with science and technology regarded as a tool to this end. If we are to criticize such a modern framework and present an alternative ethical standard that is not too human-centric or current-generation-centric, we need to be able to engage in dialogue with the dead and embrace a sense of responsibility toward future generations. This research refers to this idea as “Ethics of the Absent” and theorizes it, not by considering how we can position religion in publicness, but by attempting to release publicness that has been confined to religion.

研究分野：宗教学

キーワード：環境文化 エネルギー政策 宗教 自然観 原発 未来世代 倫理 東日本大震災

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 自然理解の相克と調停

3.11以降、原子力エネルギーをはじめとする自然の力を人間は管理できるという近代的な自然観への見直しが強くなった。そうした議論の中には、原子力技術を一神教の産物として非難し、日本の伝統的な自然観へと立ち帰れという主張もあった(中沢新一『日本の大転換』2011年)。脱原発の言説の中には、たとえば梅原猛に代表されるように「草木国土悉皆成仏」の思想(万物の等価性)を再評価し、人間を自然の支配者と見なす西洋的自然観から脱却すべきと訴える論調も、繰り返し見られた。

しかし、西洋近代的なもの(一神教的価値)と日本的なもの(多神教的価値)を対立的にとらえ、後者を礼賛する形で、問題解決の糸口を与えるかのような手法に、安易に組みすることはできない。むしろ本研究で明らかにしたいのは、こうした現状を踏まえた上で、異なる価値観や自然観を架橋する視点をどのように獲得できるのか、ということである。

なお、本研究では、自然と人間の関係を問う際の媒介項としての動物に注視する。そのことは、わが国の宗教文化・環境文化を把握する上で必須のことであるが、同時に、ジョルジュ・アガンベンをはじめとする現代思想家も動物と人間の関係に関する論考を精力的に著しており(アガンベン『開かれ 人間と動物』2004年)、近代的な人間観を批判的に検証する上で、動物を視野に入れることは現代思想の潮流の一つでもある。

### (2) エネルギー政策を考えるための倫理的基盤

今日、わが国でエネルギー政策を議論する際には、もっぱら安全性や経済効果に論点が集出し、その倫理的側面に関心が及ぶことがきわめて少ない。しかし、今後早急に、原発の再稼働や再生可能エネルギーの方向性を決めていく必要があり、そのプロセスの中で倫理的判断を欠くことはできない。

3.11の後、ドイツが明確な脱原発へと踏み出したことはよく知られているが、その際、メルケル首相が重視した報告書は、キリスト教関係者3名を含む15名の委員から構成された「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」が5月30日に提出したものであった。報告書の中では、ドイツのキリスト教会が積み上げてきた議論が反映されていた。原発は安全性や経済効果の視点だけではなく、未来世代に残す自然環境の質に関わる倫理的な問題として議論されたのであり、その倫理的議論にかみ合う神学的・宗教社会学的作業が蓄積されていた。ドイツと日本とでは、宗教が置かれている社会的状況が異なるとはいえ、いずれの国においても、宗教が社会における長期的な価値形成に果たす役割を決して過小評価すべきではない。

今なお多くの国で、宗教倫理的な価値規範

は重要な役割を果たしており、エネルギー問題に関して国内事情に対応するだけでなく、国際社会に対しても積極的な問題提起を行うべきである。

### (3) 未来世代に対する責任倫理

3.11において生じた突然の離別、そして埋葬や葬儀さえ許されなかった大量の死者は、死者と生者の関係を国民的なレベルで問い直すきっかけを与えることになった。また同時に、福島第一原発の放射能汚染は、まだ生まれていない未来世代に対する心配を大きく駆り立てることもなった。このように、3.11は、死者と未来世代と、今、生きている我々との関係をめぐる問いを突きつけた。死者との関係を取り結ぶ作法を、多くの日本宗教が持っているが、そうした伝統的な「不在者の倫理」を土台の一部としながら、未来世代を対象とする「不在者の倫理」を構築することを本研究は目指す。未来世代は、現代世代の行為の影響を直接に受ける利害主体である。3.11以降の被災地支援を通じて、宗教の「公益性」が話題とされることが多かったが、「不在者の倫理」を、広い意味での公益の一部として位置づけ、未来世代に対する責任倫理の基盤を構築する。

## 2. 研究の目的

(1) 日本の近代的自然観が確立し、それが科学や科学政策に影響を与えたプロセスおよび、近代日本の国策の中で、科学と宗教が補完的な役割を果たしてきたプロセスを明らかにする。

(2) 近代以前の日本の自然観の中で、動物が果たしてきた自然と人間との間の媒介的な役割を考察する中で、日本の自然・人間関係の独自性を探ると共に、それが近代化のプロセスの中で、どのように失われ、現代の自然観(人間中心的自然観)に影響を及ぼしているのかを明らかにする。また、日本における独自性の追求だけでなく、それが現代思想の中で積極的にテーマ化されている動物・人間関係とどのような関係を持ちうるのか、その普遍的側面をも明らかにする。

(3) 一神教的伝統における世界観・自然観が近代科学に及ぼした影響、および、日本をはじめ東アジアの宗教文化(多神教的文化)における科学の受容プロセスを考察して、一神教的価値と多神教的価値を対立的にとらえず、むしろ関係づけるための宗教倫理的基盤を明らかにする。

(4) 原子力エネルギーに対する倫理的な議論が、主要国および宗教界において、どのようになされてきたのか資料収集し、宗教的価値観とエネルギー政策の相関関係を明らかにする。

(5) 公益・公共概念を、日本の環境文化および宗教文化の中で解釈し直し、近代的な理解の枠組みから排除されてきた要素を明確にすることによって、死者や未来世代を視野に入れた「不在者の倫理」を構築し、現代世代の倫理的責任の基盤を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 文献による調査・研究

科学的世界観と宗教の関係に関する文献：西洋における近代科学の発展とその背景にあるキリスト教の自然理解の関係、および日本における宗教と科学の関係についての文献を収集した。

自然・動物理解に関する文献：日本における動物と人間の関係を論じた文献を、宗教史・民俗学・動物学の中から幅広く収集する。また、現代思想における動物論に関する文献も収集した。

エネルギー政策と倫理的判断基盤に関する文献：原子力エネルギーや再生可能エネルギーに対する倫理的な議論が、主要国の宗教界において、どのようになされてきたのか、資料を収集した。

宗教と公益・公共性に関する文献：政教分離、世俗主義、ポスト世俗主義に関連する文献を収集した。

未来世代への倫理に関する文献：先祖祭祀論、環境倫理などから、未来世代への倫理を構築していくための手がかりとなる文献を収集した。

#### (2) インタビューによる調査・研究

国内外の関連学会に参加し、研究の動向を把握した。

本研究課題に関連するテーマに取り組んでいる海外の研究者へのインタビューを行った。

#### (3) 研究成果の発表

毎年度、本研究の暫定的な成果を日本宗教学会、宗教倫理学会、日本基督教学会等で発表した。その他、国内外の招待講演においても本研究の成果の一部を発表するように努めた。

毎年度、研究成果の一部を論文として発表した。日本語論文だけでなく、外国語雑誌に英語論文を積極的に投稿し、国際基準の中で本研究の質の向上を目指した。

### 4. 研究成果

#### (1) 自然・動物・人間の相互関係の再認識

長期的なエネルギー政策を論じるためには、自然と人間との関係を倫理的な視点から関係づけ、新たな環境文化を構築することが求められる。ただし、人間が自然の支配者ではなく、むしろ、その一部であることを認識するためには、勢い壮大な自然環境に目を向けるより、動物との関係を再考することが有益である。

近代になって発展した西洋の宗教学では、人間と動物を分けるものとして「宗教」を規定した(デュルケーム、エリアーデ等)。宗教の起源を「動物性」の終わりに求めたのである。確かに、人間には他の動物にはない特性がある。しかし、近年、遺伝学、霊長類学、考古学、社会人類学、進化生物学などによる人間の起源の探求は、多くの部分において、人間と動物の根本的な差異より、むしろ両者の連続性を明らかにしてきた。このような科学的知見の助けを借りながら、我々は人間を広く動物との相互関係において洞察する必要がある。

#### (2) エネルギー政策と宗教倫理・環境文化の関係づけ

東日本大震災(2011年)が未曾有の被害をもたらす中、いち早く全日本仏教会から出された宣言文「原子力発電によらない生き方を求めて」は、原発・エネルギー問題に対する新たな意思表示として注目された。また、原発への直接的な批判の他に、日本の宗教界では、これまで十分な関心が注がれてこなかったエネルギー問題、とりわけ自然エネルギーへの取り組みが、3.11以降の新たな課題として現れてきた。「生長の家」によるメガソーラー施設の建設(2015年)のような大規模なものはまだ多くはないが、宗教施設などに積極的に太陽光パネルを設置する動きは広がりがつつある。原発事故により、広範囲に及ぶ土地が放射能に汚染され、人間にとどまらない様々な「いのち」、さらには未来世代の「いのち」をも脅かす危機的状況に対し、どのように向き合うべきかが、3.11以降、広く模索されてきた。

ポストモダン時代の宗教性は、個人別にカスタマイズされた「小さな物語」の集合体であると言える。しかし、そうした個人単位でセグメント化(細分化)された「小さな物語」では、個人の精神世界を満足させることができたとしても、地球環境問題やエネルギー問題のような大きな課題には対応できない。なぜならば、それらは、人間一人ひとりが何を信じているか、信じていないかにかかわらず、強制的にすべての人間を巻き込むことになる「大きな物語」だからである。つまり、「小さな物語」による充足に慣れきった社会の中で、いかにして「大きな物語」としての環境問題を語るができるのか、が宗教倫理と環境文化において求められている。

#### (3) 宗教・科学・公共性をつなぐ新たな視点 「不在者の倫理」の基礎付け

近代国家における公共性は「現代世代」の「人間」の利益を最大化することを前提とし、科学技術はそのための道具とされてきた。こうした近代的枠組みを批判し、過剰に人間中心でも、現代世代中心でもない倫理規範を提示するためには、死者との対話や未来世代への責任意識が欠かせない。これら過去お

よび未来における不在者を記憶・想像することは、現在の存在者である我々に対し、具体的な倫理的責任を喚起させる。本研究では、それを「不在者の倫理」(Ethics of the Absent)としてとらえ、その基礎付けを行った。それは公共性の中に宗教をいかに位置づけるかではなく、宗教の中に閉じ込められてきた「公共性」を解放する試みとして展開される。また、それは「過去の不在者」と「未来の不在者」を統合的に見、その中間存在としての「現在の存在者」(我々)を倫理的に止揚する倫理である。

「現在の存在者」の利益を最大化するために用いられる科学技術を、ただ現代世代の利害関係、現代世代の公共性の内部において批判するだけでは十分ではない。宗教倫理においてなし得る固有の働きは、「過去の不在者」にかかわる豊穡なりソースを活用し、同時に「未来の不在者」に対する想像力を活性化することを通じて、過去と未来に対する倫理的射程を拡大し、それによって現代世代に課せられた責任を喚起することである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

小原克博「環境問題に対して宗教が果たす役割 『ラウダート・シ』を手がかりとして」、『福音宣教』2018-4、2018年、20-26頁(査読無)

小原克博「犠牲の論理とイエスの倫理」、『福音と世界』2018-3、2018年、6-11頁(査読無)

Katsuhiro Kohara "Sacrifice, Religion and Nation: Essentials for Peace-building in the Age of Terror," *Journal of the Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions* (JISMOR) 12, 2017, pp. 35-51 (査読有)。

Katsuhiro Kohara "Japanese Ethical Attitudes to Animals", *Dharma World* 44, 2017, pp.6-8 (査読無)。

小原克博「不在者の倫理 科学技術に対する宗教倫理的批判のために」、『宗教と倫理』16、2016年、3-17頁(査読有)。

Katsuhiro Kohara "Analysis of Conflicting Religious Values to Achieve Tolerance and Peace: Discourses on Monotheism and Polytheism in Japan" (Arabic), *Japanese and Oriental Studies* (Cairo University) 6, 2015, pp.153-158 (査読無)。

小原克博「「一神教と多神教」言説を読み解く」、『福音と世界』2014-3、2014年、10-13頁(査読無)。

[学会発表](計 22件)

小原克博、宗教と現代社会との関わりにつ

いて 境界線を行き来する、本願寺国際センターゼミナール 第40回特別記念シンポジウム「宗教と現代社会との関わりについて」、2018-02-04、門法会館

小原克博、持続可能な社会を考える視点としての「大地性」「身体性」、同志社大学 良心学研究センター 公開シンポジウム「我等、地(つち)に生きん 持続可能な社会と人間の責任」、2018-01-22、同志社大学 今出川キャンパス

小原克博、エネルギー問題をめぐる倫理的課題と宗教 持続可能な社会のための指針を求めて、電気学会 倫理委員会特別企画、2017-12-01、京都大学 吉田キャンパス

小原克博、科学の進歩と生命をめぐる倫理的課題の過去・現在・未来 キリスト教における議論を参考にしながら、2017-11-14、東洋哲学研究所 連続公開講演会 2017、梅田スカイビル

小原克博、「いきる」ことの諸相、京都大学 未来創成学国際研究ユニット、同志社大学 創造経済研究センター、一般社団法人 虚空会共催 研究会、2017-11-11、大徳寺山内 養徳院

小原克博、宗教倫理が問うべき課題、宗教倫理学会 研究会、2017-04-20、同志社大学 今出川キャンパス

小原克博、エネルギー飽食の時代におけるオルタナティブ 持続可能な社会と大地の安息のために、日本基督教団 国際青年会議 in 京都、2017-03-28、同志社大学 今出川キャンパス

小原克博、「食の神学」の基礎付け アジアおよび科学技術の視点を交えて、日本基督教学会 近畿支部会、2017-03-27、関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

小原克博、公共性の原点としての食卓(サクラメント) 科学技術に対する倫理的批判の基礎付け、日本基督教学会 近畿支部会、2016-03-28、同志社女子大学 今出川キャンパス

小原克博、道徳の歴史的位置づけと不在者の倫理の展開、宗教倫理学会 研究会、2015-11-05、キャンパスプラザ京都

Katsuhiro Kohara, Sacrifice, Religion and Nation: Essentials for Peace-building in the Age of Terror, International Colloquium on War and Peace: Religious Perspectives, 2015-10-31, Alliance Bible Seminary, Hong Kong

Katsuhiro Kohara, How can the religious communities contribute to tackling the contemporary ethical problems?, The XXI IAHR World Congress 2015, 2015-08-28, Erfurt University, Germany

小原克博、ヒト・動物・自然の新たな公共性の模索 文化比較の視点から、第4回 神戸 全ての生き物のケアを考える国際会議 ICAC KOBE 2015、2015-07-19、神戸大学統合研究拠点

Katsuhiro Kohara, Analysis of Conflicting Religious Values to Achieve Tolerance and Peace: Over Discourse on Monotheism and Polytheism in Japan 2015 International Conference "Religion and Values", 2015-02-21, Cairo University, Egypt

Katsuhiro Kohara, The Metamorphosis of Religion in the Public Sphere: In the Battle with Modernization and Secularism, International Conference "How do Turkey and Japan contribute to solving the problems in the Middle East?", 2015-02-05, TOBB Economics and Technology University, Ankara, Turkey

小原克博、動物と人間の関係 日本文化と一神教文化から見える多様性、テュービンゲン大学同志社日本研究センター・同志社大学 一神教学際研究センター主催 公開講演会「動物・妖怪の文化比較 日本文化と一神教文化をめくって」、2015-01-29、同志社大学 今出川キャンパス

小原克博、環境文化と物語 文明論的視点から見た宗教の役割、第 5 回 宗教と環境シンポジウム、2014-10-25、高野山大学

小原克博、現代の倫理的課題に対し、宗教共同体はいかに貢献できるのか 「物語」再考、宗教倫理学会 第 15 回学術大会、2014-10-04、キャンパスプラザ京都

小原克博、自然エネルギーと日本の未来、ひらめき ときめきサイエンス(日本学術振興会)「自然と人間の関係を知り、自然の恵み(自然エネルギー)を活用しよう」、2014-08-03、同志社大学 今出川キャンパス

小原克博、宗教倫理学の展望と宗教者の役割 エネルギー政策を語るために、「環境問題における宗教者の果たすべき役割」に関する研究会、2014-01-11、天理大学

①小原克博、環境文化・宗教文化から見たエネルギー論、公開シンポジウム「自然エネルギーを考えるための環境文化・宗教文化技術と思想が会う未来を模索する」、2013-11-02、同志社大学 今出川キャンパス

②小原克博、環境文化とエネルギー政策の倫理的基盤についての考察、宗教倫理学会 第 14 回学術大会、2013-10-13、キャンパスプラザ京都

〔図書〕(計 2 件)

小原克博『一神教とは何か キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』平凡社(平凡社新書) 2018 年。

小原克博・勝又悦子編『宗教と対話 多文化共生社会の中で』教文館、「宗教と対話 多文化共生社会の可能性と宗教間教育の意義」執筆(77-99 頁)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.kohara.ac>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小原克博 (KOHARA KATSUHIRO)

同志社大学・神学部・教授

研究者番号 : 7 0 2 8 8 5 9 6